

令和七年 第二十二回おうめ子ども俳句コンテスト入賞作品講評

【小学生の部】

最優秀賞

じいちゃんの作ったきゅうりかじりつく

藤橋小（四年） 狩野 琴音

大好きな「じいちゃん」が作ったきゅうりは、最高においしい。琴音さんは畑で食べたのでしょうか。「かじりつく」からきゅうりの新鮮さ、みずみずしさがダイレクトに伝わってきます。来年もさ来年もずっと「じいちゃん」のきゅうりが食べたい、そんな気持ちまで分かる素直な句が感動を呼びました。

【二年】

優秀賞

あさがおがしぼんだすがたはいもむしちゃん

第三小 山下さくら

あさがおの花は、朝に咲き夕方にはしぼんでしまいます。美しく咲いた花でなく、しぼんだすがたに目をつけ、それが「いもむし」に見えたということです。毎朝水をやり、大切に育てているからこそその発見です。

入選

なつやすみあおぞらきらりかぶとむし

新町小 永野 佑佳

まちにまったなつやすみ。青空はきらりと光る。光るのは青空だけではない。子どもたちに愛される「かぶとむし」は大きな角をもち、黒褐色の体はつやがあつて、きらりと光っているのです。

入選

おばあちゃんなつにあえるよまたきてね

新町小 守屋 遼大

夏休みに遊びに来てくれたおばあちゃんが、帰っていくところです。見送りながら、少しさびしそうなおばあちゃんに、「なつにあえるよ、またきてね」と声をかけてあげた遼大さんのやさしい気持ちが表れています。

【二年】

優秀賞

なつやすみうみにとびこむすべりだい

河辺小 前田 詠太

「うみにとびこむすべり台」は、最初、海のそばにあるホテルのプールだと思いましたが、海の中に作られたプールが本当にあるんですね。すべり台から海に向かってばしゃんと飛びこみます。潮の香り、波の音、しよっぱい海の水、スリルと迫力満点です。なんどもなんども飛びこんで、最高の夏休みの思い出となったことでしょう。

入選

なつやすみいことあそぶばあちゃんち

河辺小 原島 咲来

ふだんなかなか会えないいのですが、なつやすみになるとおばあちゃんの家でいっしょに遊べます。それは毎年同じです。「ばあちゃんち」だからこそでできるなつやすみの楽しみです。

入選

あつすぎてやさいそだたずははがなく

第二小 平 夢葉

夢葉さんのお母さんは農協などに作った野菜を出荷しているのでしょうか。連日の猛暑は農業にとり異常事態です。いつもお母さんをそばで見ている夢葉さんには、お母さんの泣きたい気持ちがよく分かるのです。

【三年】

優秀賞

かまきりがほした上ばき見にきたよ

新町小

川俣 芽生奈
かわまた めいな

きょう、学校はお休み。洗った上ばきをほしておいたところ、そこにかまきりが近づいてきました。何をしにきたのだろう。そつと見ていると、何ごともなくカマキリはどこかへ行ってしまうした。映像を見ているような楽しい句です

入選

セミの声流しそうめん食べながら

第二小

吉原 珠右助
よしわら しゅうすけ

セミの声をうるさく感じる人は少なくありません。でも、今日は「流しそうめん」です。流れてくるそうめんを、一生けん命はしでつかもうとするのですが、うまくいきません。ワーワー言いながらそうめんを食べる楽しさ。いつもうるさいと思うセミの声も、なぜか今日はいい声です。

入選

こんばんはばあばのいえにカブトムシ

新町小

近藤 美空
こんどう みそら

おばあさんの家はくぬぎやこならの木がある、田舎の方にあるのでしょうか。夏休みに遊びに行きました。すると、美空さんが来たのを知っていたかのように、カブトムシがやってきたのでした。

【四年】

優秀賞

ふきのとう雪からめざめぐんぐんと

第四小

田中 結菜
たなか ゆな

雪の多い地方では冬が長く、春が待ち遠しいのです。そんな気持ちを知っているかのように、ふきのとうは雪の中で芽を出す準備をしています。やがて春。雪の中から一番に芽を出すのがふきのとうです。「雪からめざめぐんぐんと」は、寒さに負けず一生懸命芽を出すふきのとうの命への応援歌だと思います。

入選

夏の川ライフジャケットきて遊ぶ

藤橋小

嘉陽 琴愛
かよう ことな

毎年、大勢の人が川遊びにやってきます。カヌーやラフティングを楽しむ人たちもいます。みんなライフジャケットを身につけています。川遊びは楽しい中にも危険がひそんでいるからです。

入選

キラキラとなみがひかりとゆれている

藤橋小

藤本 藍衣
ふじもと あおい

この句には季語がなく、川なのか海なのかも分かりませんが、沖縄あたりの夏的大海だろうと想像しました。海に入っている藍衣さんの目線は波と同じ高さです。目の前で波と光が揺れている美しさは「キラキラと」にまとめられています。

【五年】

優秀賞

夕方の入道雲は空の城

若草小

石井 志穂
いしい しほ

真夏の空に入道雲がぐんぐん張り出している様子は見ていても力強く迫力があります。それをお城に見立てることはよくありますが、志穂さんは夕方の入道雲に目を向けました。昼間の真っ白な入道雲と違い、夕方に見るそれはさまざまな陰影が生まれ、より立体的に見えます。その姿は「空の城」と呼ぶにふさわしい堂々たるものでした。

入選

縁側で祖父とすいかの種飛ばし

若草小

宮崎 みやざき りつ

入選

縁側があるおじいさんの家でしようか。そこですいかを食べていると、種飛ばしをしようということになりました。孫に負けまいとおじいさん。さてどちらが遠くまで飛ばしたのでしょうかね。

うきわごと笑いころげる夏の海

藤橋小

鈴木 すずき 聡汰 そうた

夏の海は楽しくて楽しくて、少しのことにも「笑い転げて」しまいます。友達と浮輪をつけて向かい合っているのでしょうか。はじけるような笑い声は浮き輪も大きく揺らすのです。

【六年】

優秀賞

助けてと日がさの中にトンボかな

霞台小

藤原 ふじはら 寛人 ひろと

地球温暖化の影響か、今年も猛暑日が続きました。それは秋になっても変わりません。人間だけでなく自然界に生きるすべての生き物にとって、猛暑は深刻な問題です。日向を歩いているお母さんの日傘でしょうか。その中にトンボが入ってきました。寛人さんには、あまりの暑さにトンボが「助けて」と叫んでいるように思えたのでした。一瞬の出来事をトンボの気持ちになつてとらえた作品です。

入選

赤々と暮れゆく空や蝉の声

河辺小

佐山 さやま 路和 るか

夕焼けはどの季節にもありますが、特に「赤々と暮れゆく」夏の夕空は燃えるような赤さです。そこに蝉の声が響いています。だんだん暮れていく空と、まだ鳴いている蝉の声との対比が効いています。

入選

水たまりにゆうどう雲の鏡かな

霞台小

北西 きたにし 真桜 まお

夏の雨は激しく、いたるところに水たまりができることがあります。その雨あがりの水たまりに入道雲が映っていました。真桜さんにはそれが入道雲の「鏡」のように思えたのでした。

【講評】

第二十二回子ども俳句の小学校応募総数は七百四十七句と、昨年より少し少ない応募でした。入賞された作品は、年々技量を上げており、読み応えのあるものが増えてきたように感じます。それは子どもたちの俳句に向かう気持ち、宿題だから仕方ないというのではなく、自然を見つめ、家族や友達、人とのふれあいの大切さを、五・七・五の十七音で表現してみようという姿勢が育ってきたからだと思います。ただ一点申し上げると、昨年度までの修学旅行を詠んだ俳句がなかったことは、とても残念でした。修学旅行ともなると、先生方のご負担が増えることは重々承知です。それでもあえて取り組んでくださることを期待したいと思います。

さて、青梅市は東京でありながら豊かな自然に囲まれ、俳句を作る環境は整っています。ここまですべて続いた子ども俳句の灯を消さずに続けていけるよう、私たちも協力を惜しみません。今後ともよろしく願います。

【中学生の部】

最優秀賞

もぎたてのカラフル香る夏野菜

第二中（一年）

青木 風花

家庭菜園での収穫を思いましたが、露店販売の一景かもしれません。夏野菜の代表といえばトマトとかキュウリでしょうが、一句からはもつと多くの夏野菜がひしめいている情景が浮かんできます。トマトだけだとしても、いろんな種類がありカラフルです。もぎたてのカラフルな夏野菜の新鮮さは、まるで香り立つようだというのです。とてもいい視点です。

【二年】

優秀賞

シャリシャリと削るも楽しかき氷

第二中

黒柳 未来

「わかるわかる」という一句です。かき氷店で見ているのも楽しいということもあるでしょうが、家庭用かき氷器でシャリシャリ、と解しました。食べることはもちろん削るのも楽しい、というわけです。兄弟姉妹で、あるいは「替わって替わって」と一騒動かもしれません。

入選

ラムネ瓶夏はいつてるこの中に

第三中

印南 祐士

ラムネは夏をイメージさせます。そのラムネ瓶の中に夏がはいつている、と捉えたところがユニークです。

入選

観音の午睡も覚ますせみしぐれ

第三中

増田 笑実依

観音様のお昼寝を覚ますほどの激しい蝉しぐれというわけで、類想の句はあるかもしれませんが、俳句的な視点で捉えました。午睡ではなく昼寝、でもよかったかもしれませんね。

【二年】

優秀賞

面越しに見える相手も汗ひかる

新町中

金崎 純人

剣道ですね。試合中でしょうか稽古中でしょうか、自分も汗たくさんですが相手も汗たくさん、その汗が間合い間合いに光るのでした。勝敗はともかく、健康的な青春の一句に仕上がりました。「相手の汗ひかる」とすると余裕のある感じになって、また違った印象になってきます。

入選

尺玉がからだにひびく夏の夜

新町中

橋本 里咲

花火と言わずに尺玉を使って、その情景を表わしたところがお手柄です。今まさに体に響く大音響とともに、大輪の花が夜空に咲いたのでした。散り失せる音も聞こえるようです。

入選

山車みとれ妹こぼしたいちごあめ

新町中

新井 かのん

お祭りの喧噪の中で、興味津々に山車に見とれている妹の姿です。手にはいちごあめ。残念、ちよっとこぼしてしまいました。中句の読みは「いもとこぼした」で七音になります。

【三年】

優秀賞

横顔に西日を纏う夏帽子

第一中

田村 昭輝
たむら あきてる

夏帽子の主は男も女もあり得ますが、ここは若い女性と解しました。そっと伺い見た横顔に、西日が容赦なく降り注いでいます。でも纏う、ですのどそれほど暑くはないのでしょうか。しゃれた夏帽子にちがいません。一転、自分のことや男同志という読みもできますね。

入選

夏休み体内時間狂いだす

第一中

東良 和慶
ひがしら かずき

夏休みの過ごし方は人それぞれですが、寝る時間や起きる時間など、時間に対しては緩くなると言っていていいでしょう。それを体内時間が狂いだす、と捉えました。面白い視点です。

入選

風鈴が風の強さを教えけり

西中

福島 唯
ふしま ゆい

あまり気に留めていなかった風鈴の音が、突然チリンチリンと高鳴りました。そこで改めて風鈴があったことと、風が強くなったことを知ったのでした。確かに「あるある」です。

【講評】

中学生の部の応募総数は一一八八句で、ほぼ前年と同じでした。最終選考に残ったのが三八句で、この全体の中から最優秀賞一句、各学年から優秀賞一句、入選二句を選定しました。例年そうなのですが、最優秀賞と優秀賞、優秀賞と入選の句の間にはそれほどの優劣はなく、特に今年は僅差だったように思います。最終的には審査員の多数決に拠りますが、結果としてそれにふさわしい句が選ばれてくるのは不思議なところです。

俳句は一七文字の短詩であり、新学年、夏休み、部活動、修学旅行など、皆さん同じような体験や経験の中で俳句を作ってくるので、どうしても同じような句が揃ってきます。それはそれで構わないと思います。できればそこに、自分らしい個性とか新しい視点や発見などが入っていると素晴らしいです。そして例年、そうした句に出会えるのは嬉しいことです。俳句という伝統文芸を身近に置いて、豊かな人生の糧にしていただければ幸いです。

（青梅市俳句連盟 菅原 敏郎）

【高校生の部】

最優秀賞

花火散る胸の鼓動と重なりて

多摩高（二年） 野本 実乃莉 のもと ゐのり

尺玉でしようか、大空に大輪の花が咲き、胸の鼓動とともにそれがさつと散っていきます。胸の鼓動はまだ高鳴ったままです。そんな情景でしようか。誰と花火を見ているのかは、読み手の想像です。読み方をかえると、あるいは二人きりでの手花火、ということもあるかもしれません。また違ったシチュエーションになり、いろいろな想像を呼び起こしてくれます。

優秀賞

花火もつ浴衣の裾を直しけり

多摩高二年 神保 涼音 じんぼ すずね

浴衣を着ての花火遊びです。はしやぎすぎたのでしようか、浴衣の裾がちょっと乱れてきたので、さつと直したのです。あるいは線香花火で屈むときに、さりげなく裾のあたりを直した、ということかもしれません。この句も誰と花火をしているのかは、読者の想像です。

入選

稲先が順に擦る白鷺の腹

八王子桑志高一年 中野 天麗 なかの あめり

植田から青田に差しかかる光景で、主役は白鷺と解しました。青田の穂先に順繰りにくすぐられながら、真っ白な白鷺が無心にえさ探しです。白と青緑のコントラストが鮮やかです。

入選

通学路張りつく制服残暑の陽

多摩高三年 児島 豪 こじま ごう

今年も二学期が始まってもう厳しい残暑でした。中句が八音で字余りなのですが、それがかえって制服の張り付く感じが強調されることになり、結果としては効果的になりました。

【講評】

高校生の部は今回が三年目です。残念ながら、応募総数は前年比ちよつと落ちましたが、中学生に比して、いわゆる恋の句が多く見られました。入賞の二作品は、読み方にもよりますがそのジャンルに入るとみてよいでしょう。恋の歌は短歌の専売特許のようにも見られていますが、俳句での挑戦も大いにやっていたのだと思います。俳句における省略の技法は、短歌ほどの赤裸々さには至らないところでの心情の吐露には、むしろ向いているともいえます。もっとも、そうした句のみに煩わされることなく、基本的には高校生らしい感性で、自然豊かな地域の特性に根差した現代的な句を期待したいと思います。

（青梅市俳句連盟 菅原 敏郎）